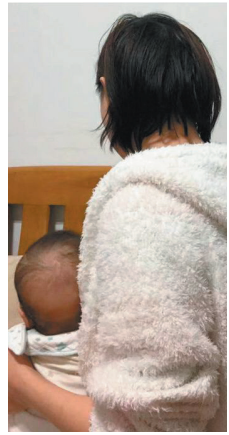
「和」川柳社 会報 No.六八八

定例会 二〇二〇年一月二三日（木）

残された女性



中国・武漢が発生元の新型ウイルス。

つい先ほどのニュース。中国に里帰りした女性。

日本国籍の者だけが乗ったチャーター機

「日本に住んで20年、永住権もあるが政府チャーター機に乗れず、未熟児の長男の薬があと一週間しか持たない」と訴える。しかし「日本国籍でないと搭乗できない」と日本大使館。

英、仏は外国籍でもチャーター機に乗せている。この違いって何？　忘れないでおこう、この国ニッポンのこと。

希望に満ちた明るい未来が描けない。旭日旗を掲げ自衛隊の艦船が中東に向かった。一方、首都東京では敗戦直後のような炊き出し風景。亀公子さんの冴え渡る２句。（周）

皆んなで選んだ今月の秀句

年初から戦ばなしの焦げ臭さ　遠田亀公子

炊き出しの列が切れない年初め　遠田亀公子

例会案内

2月例会　2月27日（木）

投稿締切　24日（月）

課題「医」　3句以内

自由吟　5句以内

自選句、自解筆もよろしく。

◆目次

川柳互選

課題吟「初」……2

自由吟……3

自選句・ほのぼの川柳……5

おたより……6

『ますらおぶり』について……6

『崖っぷちの時代と川柳』紹介……10

「プロ文学運動の盲点」改め「戦争前夜抄」⑭……11

シベリア抑留の記録⑮　故・秋山茂氏の手記……13

編集後記を兼ねて……16

1月の川柳互選

◆課題吟「初」

（互選）一人３句以内吐

初秀句天変地異か炎鵬か　未知子
演説に袖を振りつつ初姿　馬頭琴

1 背番号「６０」つけて初仕事　林
1 初仕事　寝正月に　薬増す　宏
1 初流氷　網走沖を　肉眼で　宏
1 初マスク　正月からの　通院よ　宏
1 春一番永田町に向けわめきたい　大峰
2 ルーレット　国民無視の　初国会　広助
2 初春の桜に誰でもきやしゃんせ　高坊
2 年初より変なニュースが目白押し　徹乗
2 初耳だ冷や汗かいて質問通告　馬頭琴
2 頑張れ官僚初心忘るは己がため？　未知子
3 ハッシュタグ付けて桜の初投稿　白眞弓
3 返るべき総理の初心腐ってる　林

3 人類史初め核など持ってない　ダン吉
3 万歳で　皇居初春　原発災　広助
4 妄言でまず麻生さん初仕事　ダン吉
4 高い山ボクの初心を試される　ダン吉
5 師と仰ぐ祖父の古着で初詣　林
5 元旦の朝からアベに腹を立て　白眞弓
5 初詣でコイン一個で祈る幸　未知子
5 セクシーに目が眩んだか初舞台　亀公子
6 書初めは不安倍増安倍政権　白眞弓
8 桜見のまともになった初共闘　馬頭琴
8 初詣神が聞いてるエゴの山　徹乗
8 初舞台　国の恥です　化石賞　広助
8 安倍政権改憲だけが初志貫徹　徹乗
9 初国会サクラサクラが追いかける　立東爺
9 初夢の安倍退陣に胸はずみ　高坊
9 初当選夫婦で共謀票固め　高坊
9 初答弁ノラリクラリと丁寧に　立東爺

9　初日の出 戦争前夜もこの光　立東爺
12　年初から戦ばなしの焦げ臭さ　亀公子
12　炊き出しの列が切れない年初め　亀公子

◆自由吟（互選）

一人 5 句以内吐

年金煽って介護大臣の椅子をやり　大峰
1　「れいわ」の太郎身体こわすな無理するな　未知子
1　中東派遣鈍感になる日本人　徹乗
1　多数派のたったひとりの目が光る　ダン吉
1　太郎さん自分を守れ皆のため　未知子
1　桜ばれその後の国会顔出さず　高坊
1　河合夫婦　アベ氏に学び　議員やめぬ　宏
2　東大は悪役人の製造所　未知子
2　文書破棄こそを保身の奥義とす　林
2　反社育て上げに定義なし　馬頭琴
2　哨戒機撃ち落とされたら改憲だ　徹乗

2　いつからかここまで堕ちた自民党　高坊
2　「福」は内 京都にキッパリ民主主義　宏
3　絶滅のジュゴン尻目に工事は進む　高坊
3　早変わり役者も舌巻く公私人　白眞弓
3　中東を歴訪するならまずイラン　高坊
3　地球儀に国連の文字消えている　立東爺
3　一人称の民主主義　国を刺し　馬頭琴
3　戦前の地獄絵図に酔う孫で　林
3　教皇氏　反核希求　長崎で　宏
4　核の数それ切り札になりますか　ダン吉
4　中東へ　国会開かず　派兵せり　宏
4　国民の首を絞めつけ八年目　林
4　自衛官なってはみたが中東に　高坊
4　我が総理厚顔無恥の確信犯　未知子
4　時どきは影がしっかりせいと言う　ダン吉
4　戦争に　加担して知る　安保法　広助
4　秘密の皮を剥がせば従属の文字　馬頭琴

5 嘘付く口こそシュレッダーに放り込む　立東爺
5 税金で　選挙運動　桜見会　広助
5 桜止め　紅葉はどうか　選挙通　広助
5 平成の合併今頃気が付く過疎の村　大峰
5 パリ協定中学生に習って来い　白眞弓
5 背広組迷彩色でなぜハシャグ　徹乗
5 ＩＲ笑い止まらぬ外資系　白眞弓
6 純血を叫ぶ麻生はナチの真似　徹乗
6 国民が忘れるまでは雲隠れ　大峰
6 シュレッダー一緒に入れたい奴ばかり　未知子
6 官僚は上を向き向き仕事する　広助
6 身の丈を　知って桜は　早く散り　宏
6 聞きあきし　説明責任　空手形　亀公子
7 商船は軍艦を呼ぶ戦の理　馬頭琴
7 町にまで病院つぶしがやって来る　白眞弓
7 やまゆりの咲かずに閉じた蕾抱く　亀公子
7 暗闇に先祖返りをする令和

8 過労死を　出して企業は　頬かむり　広助
8 共闘の時代を告げる初日の出　林
8 丁寧にウソ八百を読みあげる　立東爺
9 原発は安全よりも泡銭　ダン吉
9 楢山へ介護難民追い立てる　大峰
9 未来図にヒト科の姿消えている　ダン吉
9 偽物の桜の国もいつか枯れ　白眞弓
9 嘘付度戦争前夜にあふれ出す　立東爺
9 搾取した金で逃亡して見せる　徹乗
9 言い訳の十二単を着る政権　亀公子
9 日本の政治見透す化石賞　亀公子
10 日本の明日をカジノで棄てる奴　林
10 無を有に希望つないだ中村師　馬頭琴
11 シュレッダー焚書に続く坑儒の血　立東爺
11 火薬庫へ足踏み入れる旭日旗　亀公子

自選句・連作

◆自選句　中野 林

昭恵氏を「女性活躍」の範とする
民主主義官邸地下に埋め立てる
忖度で研ぎすまされたシュレッダー
「アベ」の名をつけて売り出す不良品
目に余るウソの山から転げ落ち
お先棒担いで危うい橋渡し

◆自選句　前田大峰

ならず者ばかり集まる内閣府
雪女煤けた顔で化けて出る
忖度とシュレッダーで瘤(こぶ)が出た
国連無視 戦始める橋渡し
海外派兵 人の陰で泣く家族
台風19号 放り投げ海賊の仲間入り

自民接待 寺銭貰って臭い飯
国連無視トランプの尻を拭いてやり
大資本青い地球を焼きまくり
煽り上手でトランプと息が合い
ポックリと村一ツ消えていく
食料自給率手からポトリと落ちて行く
自衛隊派兵 海賊は居なかった
トランプに脅され戦の橋渡し
狂ったか青い地球に火を付ける
晋三の戯言で変える民主主義
暁を待たずに桜散らすならず者
反社会勢力ばかり税で眺める姥桜
シュレッダー特需となった内閣府

《一隅を照らす＝医師・中村哲》　周 立東爺

銃に銃 怒り怨念血の連鎖
伯父に火野葦平 これも連鎖か医師めざす

戦火逃れ難民の群れに立ちつくす
誰も行かぬ聴診器持ち空を飛ぶ
啓示あり荒れ地で水と民思う
聴診器より用水開削ブルドーザー
地の底に命の水を掘り進む
大河に棹さす日本古来の堰斜め※
怨念か錯誤か　狂気の一弾命止む
師は星に台地の青さより蒼く

中村哲医師 銃撃され死亡

アフガン、車で移動中

運転手ら5人も

【イスラマバード共同】アフガニスタン東部ナンガルハル州ジャララバードで4日、同州で農業支援などに取り組む福岡市の非政府組織（NGO）「ペシャワール会」現地代表、中村哲医師（73）らが乗った車が武装した男らに銃撃され、中村さんが死亡した。日本政府関係者が明らかにした。

州報道官によると、中村さんのボディーガードや運転手ら5人も死亡した。（5面＝現場厳戒、31面＝人道支援志半ば）

事件が発生したのは午前8時ごろ。目撃者によると、不審な車2台が待ち伏せし、通り掛かった中村さんの車を両側から銃撃したという。

アフガンのガニ大統領は

中村哲さん

※「斜め堰」：堰づくりは川の流れに石を投下するためすぐ流される。哲師は高知県の山田堰が上流に向かって斜めに出来ている日本古来の技術（斜め堰工）を知り、現地で採用した。「斜め堰」は金沢市城南町の鞍月堰が斜め堰だった。「犀川の貴重な文化遺産だ」と訴えていたが撤去された。残念である。（立東爺）

◆ おたより　岩佐ダン吉さんより

鶴彬顕彰碑を建立した大阪城公園から堀に沿って下ると見事な梅林がある。多くの府民が訪れるがなかなか顕彰碑までは（大半の人が知らないと思う）。近く碑を説明するリーフレットを一新。JR「森ノ宮駅」・地下鉄「谷町4丁目駅」・碑の隣にある「豊国神社」などに毎度置かせてもらう予定。ぜひ来阪を。

『ますらおぶり』と『たおやめぶり』について

編集子

岩原一角さんから問題提起されていた、『ますらおぶり』の話。一応この話題に区切りを付けたくて、解説に適任者と思われた寺内徹乗さんにお願いしましたが、2月11日に西田幾多郎について講演を依頼され、その準備で手が回らないとのこ

と。小生が編集責任者の立場で考えてみました。（寺内さん参加の集会は2月11日、「憲法記念の日・紀元節を考える市民集会」／主催：聖戦大碑撤去の会）

この『ますらおぶり』は、賀茂真淵（かものまぶち）らの歌人たちが「和歌の理想は万葉集の中に見いだされる」と説き、その歌風が『ますらお（益荒男）ぶり』としました。一方、『古今和歌集』など、万葉集以後の和歌は『たおやめ（手弱女）ぶり』としています。

ほのぼの川柳

遠出して車の中でねんねだよ　神田鯛
運の良さ決めてみせよう宝くじ　寿賀子
豆まいて祓えられない欲と厄　寿賀子
クシャミして一年巡る春を知る　寿賀子
たわむれに妻を背負いて腰くだけ　立東
悩み忘れ可愛く老いていくホーム　立東

岩原さんが「これからは『ますらおぶり』一本でいく、「和」は『たおやめぶり』だ」と云われ、その後、投句されず、具体的な説明もないのでわからないのですが、なにか参考になるかも知れないので、『ますらおぶり』『たおやめぶり』についてネットから情報を拾いまとめてみました。

――

『万葉考』という書物がある。江戸後期に賀茂真淵が書いた万葉集の注釈書で全20巻。巻6までが賀茂真淵が書いたもので後は弟子が賀茂真淵の意見をまとめたものである。

『万葉考』は批評意識に支えられ、独創性に富んだ注釈書として、万葉研究史上に画期的な意義をもつとされ、総論で「万葉集」の本質を「ますらお（益荒男）ぶり」と捉え、以後の「万葉集」研究に大きな影響を与えたとされる。

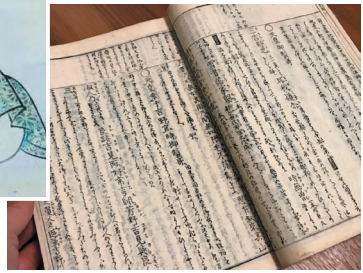
江戸中後期、人為的な君臣の関係を重視する朱子学を批判し、「日本人の作為のない自然の心情・態

度こそ人間本来のあるべき姿である」と説き、その精神が万葉集にあるとした。

『ますらおぶり』は、「男らしく」「日本男児らしく」という意味で、「男性的で大らかな歌風」をいう。それに対して、『古今和歌集』以後の歌集は「たをやめぶり」（女性的で優雅な歌風）といった。

←賀茂真淵肖像画

↓「万葉考」原書



つまり、和歌を男性的な歌風と女性的な歌風とに分けて考えている。

賀茂真淵は平安時代以来続いた女性的な歌風「たをやめぶり」への反発から、和歌は「すめらみくにの上つ世の姿」、つまり万葉時代に帰らなければならないと主張し、万葉集の精神を尊重しようと主張した。これが『ますらおぶり』の話である。

この主張の背景にあるのは、江戸中期、江戸儒教や仏教の影響で、「武士たるもの、恋愛を文学にしてはならない」というような風潮が生まれた。「男女の愛」を文や歌に表現することは武士のやることではない、とされるようになったようである。

『万葉集』は男らしい歌だというが、神話時代や古代日本においては、武士の元祖のような須佐之男命（スサノオノミコト）や日本武尊（ヤマトタケルノミコト）は、戦さの歌「ますらをぶり」の歌と共に、男女の歌を多く詠んでいる。天智天皇、天武天皇、藤原鎌足の恋歌もたくさん載せている。

そもそも、万葉集の最初に載っているのが、スサノヲの求婚の歌で有名である。教科書にも出て来ておなじみの歌を紹介。

《八雲立つ　出雲八重垣　妻ごみに　八重垣作る
その八重垣を》

（読み方：やくもたつ いづもやえがき つまごみに
やえがきつくる そのやえがきを）

（意味：（さかんに雲がわき立つ）出雲の幾重に
もめぐらした垣根。妻をこもらせるために八
重の垣を作る、その美しい八重垣を。＝「妻
を厳重に守るために八重の垣を巡らす」）

この『ますらおぶり』に対して、「たおやめぶり」は女性的な歌風としているが、賀茂真淵の弟子・本居宣長（モトオリ・ノリナガ）は、『源氏物語』を高く評価し、「たをやめぶり」も日本の文化の大切な流れであるとして、賀茂真淵を批判しているようである。

「たおやめ」とは、手弱女＝女房のしなやかな腕のことである。

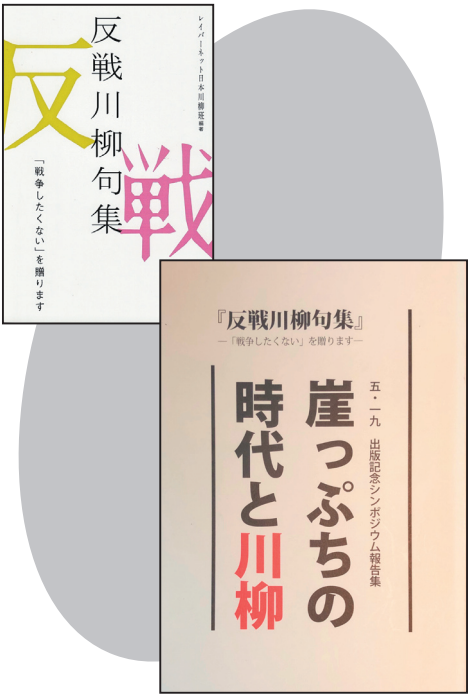
紀貫之（キノ・ツラユキ）（古今和歌集編纂者）が云う。「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を 聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男女の仲をも柔らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」。一見、かぼそく弱々しく見えるが実は天地を動かすほどの力があるという。

なんせ乳飲み子を背に、子どもを抱きあげ、手を引き、歩く女性をみるにつけ、その力強さは、並みの男以上である。そしてまた、男の荒々しさを和らげる能力をも女性は持っている。硬・軟に対応し、柔軟に生きる女性のしたたかさ。男はマネが出来ない。男として感服する次第である。

このようにみると、歌風を「男らしい、女らしい」と二分するのはいかがなものかと疑問が生ずる。男女平等、女性進出を期待される今日、なおのことである。安倍総理が強引に国書から採ったと主張する「令和」がらみの万葉集。『ますらおぶり』からも川柳を考えるきっかけになった。（了）

『反戦川柳句集』戦争をしたくないをおくります』

出版記念シンポジウム報告集『崖っぷちの時代と川柳』紹介



白眞弓さんも参加する東京・レイバーネット川柳班が企画出版した『反戦川柳句集　戦争をしたくないをおくります』の出版記念シンポジウムが昨年6月に開かれ、その全容を一冊にまとめた報告集が送られて来ました。「崖っぷちの時代と川柳」。

シンポジウムには寺内徹乗さんもパネリストで参加。内容はシンポジウムにふさわしく重厚なもの。ぜひ連絡して入手してご購読を。目次に従って、内容を紹介します。

・私たちはどのような川柳をめざすべきか　乱鬼龍
・川柳は血をもって書け　高鶴礼子
・鶴彬に出会った先生と生徒たち　宇部功
・鶴彬の生誕地で歴史を学ぶ　寺内徹乗
・天皇制に楯突く川柳　胡沢健
もっと反戦川柳をひろげるために
・心意気を感じた高鶴さんの句　蘭綺麗
・川柳だからこそできる　芒野
・鶴彬年譜

シンポジウムは、「戦争前夜」という今日の世相、危機意識を反映して鶴彬の生涯と作品に焦点が当たっています。高鶴礼子さんの基調講演は必読のもの。「気づくこと」とそれが「本質を捉えているのか」という

こと。表現することの意味を再確認しました。拷問でも転向しなかったことについて「もしも自分が転向という道を選んでしまったら、いままで書いた俺の川柳が全部嘘になってしまうと鶴彬はこらえたんだと思う」、「川柳は五・七・五の非常に短い、小さな詩形です。でも、そういう姿勢で一句を書き、発信していくこと、これが求められている。」とのご指摘、例句を元に話されています。大変参考になります。報告されている皆さんそれぞれの内容も値千金。ぜひ申し込みを。「反戦川柳句集」も是非に。

▼申し込み先　レイバーネット日本川柳班
▼東京都板橋区向原2-22-17-108
▼電話：03-3530-8588 FAX：03-3530-8578
▼〒振替00150-2-607244　レイバーネット日本
▼メール　labor-staff@labornetjp.org
▼頒価：シンポジウム報告集　一冊500円
　　反戦川柳句集　一冊700円
▼送料：三冊まで180円

「プロレタリア文学運動の盲点」改め、『戦争前夜抄』⑭

周　立東爺

この連載はプロレタリア文学に戦争が描かれないことを指摘した高橋隆治の『戦時下文学の周辺』に刺激を受けたのがきっかけでした。

そもそもの動機は、いま安倍政権が進めている「改憲」の動き。「嘘つきは戦争の始まり」なら今がまさに「戦争前夜」。先の戦争の前夜に何があったのか？その時の民衆と文学、その学び直しをしたいと常々思っていたこともありました。そこで、この連載のタイトルを**「戦争前夜抄」**に改題し、川柳を軸に様々な角度から「戦争前夜」を考えてみたい。

この号で14回目。いままでのタイトルを並べてみました。それぞれの回で苦労して元資料にあたって

考えました。いろんな発見がありました。

◆問題提起　2018年9月No.672
・戦争が描かれない戦時下の文学

◆第1回　2018年10月No.673
・川柳にみる戦時下の世相

◆第2回　2018年11月No.674
・火野葦平「土と兵隊」欠落部分の復元

◆第3回　2018年12月No.675
・考察＝戦争文学と鶴彬

◆第4回　2019年1月No.676
・考察＝弾圧と拷問

◆第5回　2019年2月No.677
・プロ運動作家と従軍記者

◆第6回　2019年3月No.678
・百人余の従軍作家たち

◆第×回　2019年4月No.679
※令和改元論考のため紙面余裕なく休載

◆第7回　2019年5月No.680
・反戦詩人　槇村浩

◆第8回　2019年6月No.681
・従軍作家　林芙美子

◆第9回　2019年7月No.682
・従軍作家　林芙美子②

◆第10回　2019年8月No.683
・国民を戦争に動員した仏教

◆第11回　2019年9月No.684
・仏教と戦争 そして暁烏敏

◆第12回　2019年10月No.685
・「親鸞と日本主義」を読む

◆第13回　2019年11月No.686
・無節操な暁烏敏

◆第14回　2020年1月No.688（＝本冊子）
改題のごあんない＝「戦争前夜抄」

シベリア抑留の記録 ⑮

「在ソ三年　生と死のドラマ」

故・秋山茂氏の遺稿より

極寒での森林作業を続けていた。突然に「名前を呼ばれ前に出た者はダモイである」と告げられた。その日の午後三時、さまざまな感慨を載せたダモイ列車はイルクックを後に、バイカル湖岸を走り抜け東へ東へと走っていた。三年が十年にも匹敵するように思われた永い抑留生活が終わる。

とにかくソ連人はよく働らく

このような老人には老人に相応しい仕事が与えられているようで、郊外の住宅地などで見掛けることだが毎朝各家庭では自分の飼っている乳牛（主としてホルンスタイン種）を門脇に出して待っていると、二、三人の老人が各家から集めた何拾頭もの牛を追い立て乍らやって来て門口に出ていた牛を群の中に入れ、近くの野原や山裾で終日のんびりと放牧し夕方になって又群を追って町に這入れば牛も心得たものでそれぞれの家に間違いなく帰って行く。このような仕事は大体老人か子供のようであったし、私の聞いたところでは働らく意欲のある者に仕事を与えない時は、行政責任を問われ市の責任者が処分されるという。そして各地域に絶対的な権限を持った少佐（マイヨール）が居て采配を振るっていた。然し就労者に職業の選択は認められないから与えられた仕事をしなければならない。

ソ連に於ける労働で日本と異なっているのは狩猟中の喫煙や雑談などが禁止されていることである。然しその反面、休憩時間や終業時間も亦厳格で建築現場の大工など終業のサイレンを聞くや振り上げたハンマーをおろしそのまま仕事場を施錠して帰える。これは翌朝出勤してすぐ仕事に掛か

るという能率を考えてのものである。とにかくソ連人はよく働らく人種である。

5　日独両国の捕虜と囚人

第二次世界大戦後、ソ連に抑留された独逸人捕虜の数は明確ではないが、一般ソ連人が独逸人に抱いていた憎悪の念は凄いもので、われわれ日本人に語る時でも「ゲルマン」というだけで唾棄（だき）し憤りを露骨に現わしていた。

ソ連では日独両国の捕虜の接近には大いに神経を使っていた模様で、事実ソ連と陸地続きの独逸であって見れば抑留中可成り多くの脱走者や抵抗して射殺された者などあったらしく羊のような日本人捕虜とは誠に対照的で、わたしは三年間に一度だけ、貨車輸送中の独逸人捕虜を遠望したがその警戒の厳重さには一驚した。輸送列車の各区貨車前後には二、三名宛の警備兵を配置する外、常に軍用犬を各車輌のデッキに配置し、列車が停車中でも左右の扉は閉ざされたままで、日本人捕虜の入ソ時でも見られなかった厳戒振りは、人づてに聞いたところでは、逃亡を企てた為に射殺されたり捕へられた独逸兵は相当数にのぼるだろういうことであった。

然し日本人捕虜の逃亡は輸送列車が満州領内にある間に限られたようで、この間は昼夜の別進行中、停車中の別なく逃亡者が相次いだが、列車がシベリヤに入ってからは逃亡者はぴたりとなくなった。「此処まで来たら逃げられない。逃げても凍死だ」という絶望感が日本人の一致した考え方であった。

唯、われわれ五十九大隊が入ソして間もない十二月十六日頃と思うが、イルクック市南方四十粁余りでアンガラ河上流の山間部に民家を改造した収容所に数日間滞在して、木材の陸揚げやト

ラック輸送の作業をしていた或る夜、わたしが不寝番司令として勤務中の午後十一時頃、収容所の門の方向から突如数発の銃声がしたので、出て見ると門の附近でソ連の警備兵数名があわただしく声高に何事か話し乍ら動き廻っているのが雪あかりに見へ、駆け付けたところ、門脇きの鉄条網の下段から潜り抜けて逃走を企てた若い日本兵が一名望楼上のソ連兵に発見され、自動小銃で射撃され弾丸が尻のうしろから陰嚢を貫いて附近の雪を血に染めて斃れていた。彼は夜明け頃イルクック市に運ばれて行き、私は日直将校の戸川大尉に始末書をとられたが、当時の日本軍将校の頭の硬さもさること乍ら、この若い日本兵が果して逃走を企てたのか、或は又当時は未だ員数外の手袋や靴下など可成りのものを各人が隠し持っていたから部落に行ってパンと交換するために脱走しようとしたのか不審は解けないがソ連軍側は逃亡として処置しているようであった。

ソ連で刑務所に服役している囚人は既述したように誰でも働かされるが、就労場所は大体公共用の建築物やこれに必要な煉瓦工場などが多く、囚人の就労場所は周囲が高い有刺鉄線の鉄条網で固められ四隅に在る高い望楼には自動小銃を構えた監視人が居るから一目で直ぐ夫れと判った。彼等は毎朝互いに手錠を掛けられ四列縦隊となって作業場に行くが、隊列の両側及び前後を自動小銃を持った十名余りの看守と逞ましい数頭の警備犬（セパード）に護られ乍ら歩くさまは異様で、その警戒振りは日本人捕虜に対する警戒より遙かに厳重であった。彼等は就労場の柵内に這入ってから手錠を外される。ところがこの囚人が誠に性質が悪く、われわれは一度囚人達と一緒に煉瓦工場で焼いた煉瓦の取出し作業をしたが、此処で思わぬ災難にあった。

（次回に続く）

編集後記を兼ねて

▼前号は昨年一年間の全句掲載。もしご自分の句を体裁よくまとめたいと思われる方、ご連絡下さい（お一人から依頼あり）。ご自分のコメント原稿も送ってください。▼会報の秋山茂さんの遺稿を目にされた方からお手紙頂戴。「亡くなった兄が抑留され帰ってから何か書きたかったようですが、逝去。大正10年生れ。1回から読みたいので…」とのこと。時間を作って印刷したい。▼今年は選挙の年。安倍総理がアベノミクスを推し進めるというが、その結果がIR事件など腐敗の姿。辞める気のない総理を辞めさせるには野党がまとまる以外にはない。▼戦争前夜というキーワードがあちこちに見られるようになってきました。連載している『プロレタリア文学運動の盲点』は改題して「戦争前夜抄」としました。テーマなどご提案をお寄せ下さい。事実を確認しながらまとめたいと思っています。これまでの作業で知らなかったことがたくさんありました。（周）

2月例会ご案内（毎月第4木曜日）

◆例会　2月27日（木）　◆投稿〆切：24日（月）
◆課題「医」　3句以内　◆自由吟：5句以内
◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見なども
お願いします。川柳に関する資料などもご紹介下さい。
◆句報を持参下さい。例会で話し合います。
●投稿FAX（076）254-0762
●メールアドレスは下段に。
郵送は下段住所へ。

「和川柳社」会報
会員募集しています！

同　　人：4000円/年
投句/購読：2000円/年
★会報の他に、関連資料などもお送りします。

和川柳社　〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30（渡辺 寛）
電話FAX：076-254-0762　PC-mail：kananabe@popolo.org
携帯：090-9445-1302　携帯mail：kan-wata@i.softbank.jp
振込先：北國銀行中央市場支店　#191 普通640「和川柳社」

発送に協力いただいています。▼《食育のグリーンノート&土の音工房《オカリナ制作》・上村彰》